平成 25 年度
お茶の水女子大学 *ECCELL* 社会人プログラムのご案内
（生活科学部 特別設置科目）

毎週**火・水・木曜**の 11・12 限（18：20～19：50）に１科目ずつ、集中授業が２科目、合計５科目が開講されます。

【後学期】
火曜日　：乳幼児教育・保育政策論Ⅱ
水曜日　：子どもと家族
木曜日　：現代保育課題研究Ⅵ
集中授業：比較保育実践研究Ⅲ
集中授業：子ども家庭支援相談Ⅱ

後学期開講科目　シラバス

乳幼児教育・保育政策論Ⅱ　　**2 単位　火曜日**　18:20～19:50
担当: 逆井　直紀（保育研究所 常務理事）

主題と目標

2012 年 8 月、国会で子ども・子育て関連法の成立で、戦後築かれた幼児教育や保育の制度が、大きく切り替えられようとしています。また地域では、子ども数の減少を受けて、幼稚園を中心に保育施設の統廃合がすすんでいますが、大都市部では保育所の待機児童問題が深刻化しています。

今まさに、日本の幼児教育や保育は転換期にあり、ここ数年で劇的な変化を遂げることになると予測されます。実際に幼稚園・保育所等において日々行われている保育は、政策や制度の影響を大きく受けており、その制度・政策のありようを考えることは、保育実践を主体的に行う上で不可欠な作業といえます。

後期授業では、貧困などの子どもをめぐる社会状況や、施設の統廃合問題や保育所の待機児童問題など乳幼児教育・保育に関わる種々の社会的、政策的問題を採り上げ、今後の乳幼児教育・保育のあり方をともに考えあうような内容を構想しています。

授業の形態

■講義　■討論　□購読　□実験　□実習　□実技　■発表　□演習

教科書・参考図書

必要に応じてプリント等を配布します。
『保育白書』2012 年版　2600 円（税別）　発売　ひとなる書房
（開講時に割引購読の申込みを受け付けます。）

評価方法・評価割合

■ 中間試験（割合：30%）　■ 小論文（レポート）（割合：30%）
■ 出席　（割合：10%）　■ 発表　（割合：30%）

授業計画／主な内容

保育政策の最新動向（特徴的な問題をとりあげながら）を学びながら、制度・政策に求めるべき方向とその実現に向けた展望を考えます。

保育制度改革（子ども・子育て関連法による新制度）の動向とその論点

保育所の待機児童問題

施設の統廃合と幼保の共用化、一体化、こども園

公立保育所の廃止・民営化、保育の市場化

幼稚園の状況

多様な家族を支える保育とは

多様な職員による保育職場の状況と保育政策

制度や条件改善を実現する展望

幼保一元化・一体化とは何か、解決すべき論点とは何か　など

※なお本講座では、当面保育・幼児教育を保育と整理し、保育所や幼稚園にかかわる制度・政策を保育制度・政策と総称します。

学生へのメッセージ

保育に関わる制度や政策の問題を考えることは、一見、日常生活とのかい離があり、保育の現場でお仕事をされている方でも、敬遠しがちだと思います。

しかし、社会全体の保育水準の向上という課題を考えた場合、現場を支える制度や政策の充実なくしてその実現は不可能といえます。また、欧州などでは、人間の基礎を培う幼児期の重要性に着目し、すべての子どもに豊かな保育を保障することが、活力ある社会を作り出すことにつながるとして、公的保育の充実に政府が動きだしています。このことは、保育の制度や政策を学ぶことが、今後の日本社会を展望するための重要な課題であることを示しています。

この講座では、政策や制度・法令等の基礎やその動向を学ぶことと同時に、保育をめぐって起きている種々の問題状況を取り上げ論議する中で、子どものためによりよい保育を実現するための課題と展望を見出していきたいと思います。

子どもと家族

2 単位　水曜日　18:20～19:50

担当:加藤　邦子（宇都宮共和大学 子ども生活学部 教授）

主題と目標

主題：少子高齢化社会における子育て支援の具体例を挙げながら、乳幼児期の子どもと家族に関する理解を深める。親子から仲間への移行が早まっていることを踏まえ、家族および社会的育児の協働によって子どもの発達支援につながることを理解できるようにする。また、保育の可能性と限界を踏まえて他の資源と連携できるように、政策、地域、生涯発達の視点から乳幼児期の支援のあり方を探究する。

到達目標：現代社会において、「親」を支援することは子どもの健やかな発達を考えていくための基礎となるものである。子どもと家族について、環境・心理・社会的側面から包括的にとらえられること、生涯発達の視点からとらえられること、子育て支援のコーディネートについて理解する。さらに気になる親子、虐待などの具体事例を読み理解できるようにする。家族にかかわる他の資源との連携と関連させ、きめ細かな支援のあり方について理解を広げる。各自の関心に応じて課題を設定し、自らの視点を取り入れてまとめ、授業の中で発表する。

受講条件・その注意

講義形式ですが、討論の時間を設けるので、意見を述べたり、質問するなど討論に参加すること、授業の中で紹介した教材などを用いて、自分らしい視点を入れてまとめ、みなさんの前で発表すること。

授業の形態

■講義　■討論　□購読　□実験　□実習　□実技　■発表　□演習

教科書・参考図書

授業の中でプリントを配布します。参考文献は紹介します。

評価方法・評価割合

■ 出席　（割合：30%）　　■ 発表　（割合：70%）

授業計画

1．保育現場で子どもだけでなく家族を対象とする意義と福祉的観点の必要性について理解する。「家族」の捉え方について考える。
2．家族はどう変わってきたのかを理解し、子育てが難しくなった背景について学修する。支援する必要性と保育現場における支援の基本原理を理解する。新聞記事などから考察する。
3．現代の家庭の背景を踏まえ、子どもにどのような影響を及ぼしているかを考えるために、具体的事例をもとに学ぶ。
4．少子化対策から子育て支援・次世代育成支援への変遷について考え、家族の背景には時代的変化、環境の変化、制度などの変遷があることを理解する。
5．結婚・子育て・子どもの離家・高齢期など、家族構成員に関して生涯発達的視点から捉えて理解する。
6．子どもの発達に応じたワーク・ライフ・バランスのあり方と子育て支援との関連性について理解を深める。
7．きょうだい、祖父母について取り上げることによって、家族内の関係のあり方、世代間関係、さまざまな家族の姿について理解を広げる。
8．父子家庭、母子家庭、ふたり親家庭とセーフティネットについて理解する。さらに他の諸国の福祉政策と比較することによって、広い視野から日本の家族について考える。
9．乳幼児期の発達と家族との相互作用について、親子から仲間への移行期の支援の具体的事例をとりあげて考える。（気になる子ども、気になる親子）
10．子どもの生活と遊び活動を共有することで対人関係の調整機能がはぐくまれることを考える。
11．親密な関係における暴力、虐待などさまざまな家族の病理についてとりあげることで、他機関との連携のあり方を学ぶ
12．保育所・幼稚園・子育て支援施設の役割を理解する。
13．親子支援の実践について学ぶ（見学）。
14．諸外国の家族政策の実際について学び、日本とどのように異なるかを捉え、今後の日本の課題について理解する。
15．家庭の多様性に対応した支援のあり方について考え、保育者としてこれからの実践につなげられることを学ぶ。

学生へのメッセージ

日常会話、仕事、メディア、新聞記事、などさまざまな機会を通して、「子どもと家族」を考えていくための課題が見つかると思います。

現代保育課題研究Ⅵ　　1 単位　**木曜日(不定期)**　18:20～19:50

担当:　浜口　順子　(お茶の水女子大学大学院　教授)ほか

主題と目標

本授業は、ゼミ形式で話し合いながら、まず受講生自身の関心をもとに乳幼児の保育実践や教育に関するさまざまな問題について各自研究テーマを設定し、最後に研究レポートを作成することをめざします。受講者が多い場合、なるべく個別指導が可能となるように、グループ別のゼミも行う予定です。

子どもの発達・育ちと保育の関係、実践現場における子育て支援の在り方、観察記録やカンファレンスの活用、保育環境や表現の問題、海外の保育との比較や保育の歴史など、身近な関心から多様なテーマを取り上げ、受講者どうしのコミュニケーションを楽しみながら各自の考察が深まる時間にしたいと思います。

授業の形態

□講義　■討論　□講読　□実験　□実習　□実技　■発表　■演習

教科書・参考図書

受講者の研究テーマや問題関心に応じて選択、推薦する。

評価方法・評価割合

■ 小論文（レポート）（割合：40%）　■ 出席　（割合：30%）

■ 発表　（割合：30%）

授業計画

1 単位なので、授業の回数は、7～8 コマ分の授業となる。受講者の問題関心や研究したいことについてまず話してもらい、研究テーマや研究方法の近い人でグループを作り、課題（講読や訪問、調べ発表など）を検討し、中間発表をする。最終的には、それぞれの研究レポートを提出し、その発表会を行う。

学生へのメッセージ

学生という身分を離れさまざまなキャリアを経ながら、人は、ますます本気で「人として育ち生きる」って何だろうと考えざるを得なくなります。生涯学習のテーマとして「保育」「成長」「子ども」などに取り組んでみると、二重にも三重にも自分の歩んできた軌跡と折り重なってきて、日常が少し新しく見え始めるかもしれません。若い学部生も一緒に受講すると思います。いろいろな世代とかかわり、自由に語り合う中から、小さな「研究」を始めてみましょう。

比較保育実践研究Ⅲ　　1 単位　**集中講義※**

(開講日時は授業計画参照)

担当:　**翁　麗芳**(國立台北教育大學幼兒與家庭教育學系　教授)

主題と目標

主題

1. 台湾における幼児教育制度の変遷：幼稚園、託児所から幼児園へ
2. 台湾社会における子ども像：子どもの生活の中の遊びと学習事
3. 多民族台湾における子育て
4. 台湾における幼児教育の形成と発展

目標

1. 台湾と日本の幼児教育関係を考える
2. 子ども観を裏付ける社会文化を考える
3. グローバル社会における子育てのあり方を考える

授業の形態

■講義　■討論　□講読　□実験　□実習　□実技　■発表　□演習

参考図書

1. 翁麗芳（2008)。台湾にみる子育て観の変化と保育の市場化。汐見稔幸他編著『子育て支援の潮流と課題』東京：ぎょうせい。186-217。
2. 翁麗芳（2008)。過度な早期教育熱は改まるか？教育偏重から「教育とケア」へ。泉千勢他編著『世界の幼児教育・保育改革と学力』東京：明石書店。242-263。

評価方法・評価割合

■ 口頭試問（割合：10%）　■ 小論文（レポート）（割合：50%）
■ 出席　（割合：20%）　■ 発表　（割合：20%）

授業計画※

2013 年 10 月 26 日（土）①13:20-14:50　②15:00-16:30　③16:40-18:10

1. 写真と DVD で 2013 年台湾の子どもの生活をみる
2. 台湾における幼保一元政策の推進

2013 年 10 月 27 日（日）①13:20-14:50　②15:00-17:15

1. 台湾における幼児教育の形成過程
   日本植民地時期（1895～1945 年）、経済発展期（1945～1980 年）、経済成長期（1981～1990's）、少子化時期（21 世紀）の 4 期に分け、台湾における幼児教育の発展をたどる
2. 21 世紀の日本から台湾の幼児教育を考える

前日の台湾の現状をふまえ、日本人の立場から台湾の幼児教育の長所と短所を考えよう

2013 年 10 月 28 日（月）①18:20-19:50　②20:00-21:30

1. 台湾における「弱勢幼兒」政策
   写真と DVD で先住民や新移民の幼児のための国民教育幼児学級を紹介
2. 台湾の幼児教育に対する論議をする

学生へのメッセージ

異郷に出てから、自国のことがより見えるようになった経験はありますか。

私は、日本に渡ってから台湾の幼児教育のルーツを探り始めました。歴史を通して台湾の幼児教育に携わりながら、台湾と日本の接点または衝突点を探っています。日本の幼児教育

者も、台湾を通して日本の幼児教育がより見えてくるのではないだろうかと期待しています。

子ども家庭支援相談Ⅱ　　1単位　集中講義※

（開講日時は授業計画参照）

担当：安治　陽子（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター 講師）

主題と目標

子どもと家族にかかわるさまざまな問題が、乳幼児教育・保育の現場でどのように表れ、それらにどのように対応し、親子を支援してゆけるか、心理臨床の理論と技法をベースにしながら、現場の事例に即して具体的に学ぶ。その際、継続的な支援を可能にするために、小学校への接続や地域資源の活用を視野に入れ、その具体的な支援の方法について考える。

授業の形態

■講義　■討論　□講読　□実験　□実習　□実技　□発表　□演習

教科書・参考図書

授業で紹介する。適宜レジュメや資料を配布する。

評価方法・評価割合

■ 小論文（レポート）（割合：50%）　■ 出席　（割合：20%）

■ 討議　（割合：30%）

授業計画※

2014年2月1日（土）①9:00-10:30　②10:40-12:10　③13:20-14:50　④15:00-16:30

保育における相談・支援

①子どもの発達支援：発達特性の理解と保育環境の整備

②保護者支援：個の支援と仲間づくりによるピアサポート

③親子の関係性支援：子どもの育ちをともに楽しむ

④保育者自身のメンタルヘルス

2014年2月2日（日）①9:00-10:30　②10:40-12:10　③13:20-14:50　④15:00-15:45

相談・支援における連携

①園内連携：保育者のチームワーク、記録とカンファレンスの活用

②園外連携：機関連携、多機関協働における保育の役割

③事例検討

④乳幼児期からの継続的な支援：次へつなぐ支援とは

学生へのメッセージ

子どもや家族と日常的なかかわりをもち、地域に根ざした保育の現場は、その親子や地域社会について、量・質ともに豊かな情報を持っています。だからこそ保育者は、親子の支援を展開する際のキーパーソンになりえます。親子を支援するということについて、保育の現場に即して、ともに考えていきましょう。前学期の授業を履修していない方も受講できるよう、授業内容、構成を工夫します。